

農

みのり

「元始、日本人は農民だった」…と言っても過言ではないくらい、日本文化は農業中心に創造されてきました。

特に、年中行事や祭りなども五穀豊穡を願ったり、豊穡を神に感謝したりなどといったように、「農業」と深い関わりを持っています。

このコーナーでは、そんな日本文化の基幹である「農業」に携わっている方やそれに関する情報、それに伴う年中行事などを紹介します。

皆に農業体験を

●ファミリー農場開放 ワタナベ シゲユキ
渡邊 重行さん(勝會在住)

■現在、農家の後継者不足が問題になっている一方で、労働時間の短縮化や余暇の増加により、市民の自然志向や農業体験志向が高まっています。そんな中、従来の「資本主義の生産手段」としての農業から、「誰もが体験できるような農業」を目指して活躍されている方が増えてきています。■勝會在住の渡邊重行さんもその一人。渡邊さんは以前は市内でも有数の大規模農家として農業を続けてきましたが、国の減反政策の増加方針に疑問を感じ、従来の生産者と消費者の「顔の見えない関係」から「顔の見える関係」づくりに農業を大きく転換させました。■休耕田を利用したレンゲ畑でのコンサート、ジャガイモやさつまいも掘り体験、地元の大豆と米を利用した味噌づくり教室などで、多くの人々との出会いやふれあいを大切にしてきました。消費者と直にコミュニケーションをとることで、人々の農作物への評価が変わってきた、と渡邊さんは言います。■「値段」という間接的な評価から、「おいしかった」というストレートな評価に変わり、そんなみんなの言葉が自分の励みになっていると言い、さらにこう続けます。「今までの農業はつまらなかった。でも今は農業ほど面白いものは無いと思う。なぜなら、自然を相手に自分の好きなやり方ができ、しかもその責任は自分でとるしかない。一見、大変だけれど、それは最終的には必ず自分の自信につながってくるものだから…」と。



「農業の面白さを、次代に伝えたい」と渡邊さん。

自然と闘うのではなく、
優しく受け入れよう。
農業は、自然を相手に、
腕だめしができる。

リストラや倒産などが叫ばれるこんな時代だからこそ、

我々人間は原点に戻る必要があります。

商品経済のように自然を相手に格闘するのではなく、「優しく受け入れる。」

そんな農業の考え方がやがて癒しへとつながっていくのです。

それこそ、人間らしい生き方であり、渡邊さんの生き方なのではないのでしょうか。

五穀豊穡を願う行事としての

花見

日本人にとって、ただ「花」と言うと、「桜の花」をまずイメージします。

もともとサクラの「サ」は「田の神・穀霊」、

「クラ」は「神座(神のいる場所)」という意味です。「サクラ」は田の神が山から里におりてくる時にいったん留まる依代となる常緑の木や花の咲く木を表していたのですが、桜の花が稲の花に見立てられ秋の収穫の占いに使われることから、「サクラ」の代表として「桜」の木があてられるようになったと言われています。

春になって桜の木に降りてきた神様を料理と酒でもてなし、人間も一緒にそれをいただくことが花見本来の意味であり、今でいうただの人間の楽しみだけでなく、農耕に結びついた大事な宗教的行事だったのです。

(参考:「日本の年中行事百科」河出書房)

ビタミン類が豊富な天然食品

「いま、この旬感!」



「干しイモ」

茨城県はさつまいもの生産高が日本第2位であり、干しイモの生産高は日本第1位のまさに「さつまいも王国」です。そんな王国の厳選されたさつまいもを使い、約1週間、天日により乾燥させた干しイモはまさに天然食品!でも、その美味しさの秘密や栄養などについては意外と知られていないものなのです。

1. さつまいもにたくさん含まれているデンプンから生まれる「甘味」、それは熱が加わると糖分に変わるため、干しイモの甘味は自然の甘味なのです。

2. 疲労回復を促すビタミンB1がみかんの約2倍、ビタミンCもリンゴの2倍、カリウムは100g中1,000mgも含まれています。

